

袖奇譚

泉鏡花作

—

「諏訪の旅籠屋、三輪の茶屋
旅籠屋、三輪の……」

酒落ではない、酒落ではない、決して串戯ではない。
い。

「諏訪の旅籠屋、三輪の茶屋。」

奈良と諏訪では、考へて見た處で、第一、酒落處か、語呂も合はず、地口の眞似事にも成らないのに、松澤孫一は上諏訪の此の旅店に宿つて、一人で床に入る、と枕の裡から蕎麥殻の怨念が、ぶつ／＼叱言を云ふやうに、ひとりでに口を衝いて、（諏訪の旅籠屋）が無性に出て来る。
成程、諏訪の旅籠屋だ、であるから諏訪の旅籠屋に違ひない、と思ふ下から、また喋舌る。

黙れ！ 諏訪の旅籠屋が何うした、と心で叱りつ

ける、舌の根も引かずに突掛ける。・・・やが
て（三輪の茶屋）なんぞは屋根ぐるみ、何處か
其處等の湖水の中へ吹飛んで、旅籠屋ばかりが、滅
多矢鱈に、恚う、土龍と云つた工合に胸のあたりを
駈廻。

讀まるゝ方にも大抵想像の着く通り、口へ出る、
喋舌る、と云つて、敢て此は、彼の聲に成つて顯れ
る次第ではない。雑と人間の音の影法師見たいなも
のが、キヤノ、留度なく胸先へ込上げて、痰にも成
らずに、其が咽喉に引擽つて、むぐ／＼と勿上る。

「煩い！ えゝ。」

と肩と首を一所に掉つて、拂ふ拍子に、スポンと
鼻へ通つて、天窓の皿にキリ／＼と應へて、（諏訪の
旅籠屋。）と耳へ来る、變な鹽梅。

勿論、まんじりとして目が冴えて寝られはしない。

元來、此の男不器用にして、音曲一切不案内、聞
いても義太は大嫌ひの禁物だし、大津繪と言へば、
盲人の杖に、犬ワン／＼と心得たのが、何を素惚氣

て三輪の茶屋なんぞが懐中に飛込んだか合點が行かぬ。尤も其の分は湖の底に沈没したらう、早やなく成つたが、諏訪の旅籠屋は矢張り。

「諏訪の旅籠屋。」と、あれ、すぐに又喋舌る。

扨て、寢て居るのは二階の十疊の眞中で、次の間に六疊が別にある。蓋し座敷についた部屋ではない、客の込む時は二組に取つて使ふのであらうが、時節柄か、世並の所爲か、湯治客は一向にない。家は昔の本陣とか言ふ、づつしり重い建もので、巨寺の如き柱がすく／＼處々に突立つて、山國には思ひも寄らない、海坊主の影が射すやうな、玄關から帳場を掛けて奥を見通した處なぞは、寄席を三ツぐらゐ合せたほどある。

此の上と下に、今夜の客と云つては、松澤と他に一人、程も遙や、飛驒の高山の聯隊に検閲の次第あつて、東京から御出張に成つたと云ふ陸軍の大佐が一人、と給仕についた小婢に聞いたばかり。はてさ

て其の人も、僕の住む山を幾つ越えて、何處の谷間に宿つたやら、二階は遠し、沓として行方が知れぬ。

と思へば、唯さへ廣いのに、次の室が開いて居て尚ほ寂しい。

寝しなには、澤山も飲まぬのが、膳の上の二銚子ばかりに太く酔つた。處へ、一風呂浴びたので、人間のふかし立ての柔い棒のやうなものが出来て、浴衣一枚で、と云ふのを、年増の女中に叱られて、寝衣の綿入で、ぐたりと成つて、裾をたゝかれる深切を事ともせず、乗出して、

「其處をしめないで置いておくれ。」とさへ云つたつけが――

悪い處に、障子が二枚、一間の口に立つて居る。寝た裾に成つて、隔ての襖際に、丁ど次の室と此の十疊の敷居の隅に寄つた突當りの處で、決して押入でない事は、一小間の破れた目から、めら／＼と冷たい舌を出す可厭な風の筋で知れる。むかうは大な穴か何ぞでありさうに、理に落ちるほど寂として居る。

「彼^む方^{かう}が（諏^す訪^はの旅^は籠^た屋^こ。）」
「彼は^{かれ}思^{おも}はず頸^{うなじ}をすくめた。」
「ぢやないか。」

松澤は偶と考へた。

去年の暮に風邪ひきから耳を痛めて、事も面倒とか聞く、中耳炎には幸に成らなかつたが、少なからず夜一夜悩んだ。・・・宵にブス／＼と息の抜けるやうな耳鳴がして、悪寒に疲れながらうと／＼と寐て、何處とも知らない體の疼痛に目が覺める、とそれが左の耳のうづくのであつた。

爾時に、思ひも掛けず、ふいと口を衝いて出たものは、恚うである、と云ふさへをかしい。

「一ちく、たツちく、太衛門どんの 一ちく、たツちく、太衛門どん。・・・」

いや、餘りたわいが無い、あとで聞合せると、此の後は、

(乙媛様は、ちんがらぼんに追はれて、)

と云ふのださうである。が、それも知らないのに、
太衛門どんが、ひよツこり、と吹矢にも當らず、ぽ
ん、と心臓の邊から飛出して鼻から耳へ駈上つた。

其の痛さと云ふものは一通りでない。キヤノと
刺し、キリと揉んで、半身を貫くばかり。御自分
は、のツツ、そツツ、あゝ苦しい、と思ふ下から、
一ちく、たツちく、と痛むやうで、止さう、言ふま
い、忘れよう、思はじ、とする隙もあらせず込上る。
其の惱に堪へず、炬燵を引搦んで、まうつむけに成
つて呻吟く處を、太衛門どんは縦横に匆廻る。

ドシンと、自分で吃驚するほど口惜紛れに胸を打
つても、えい、と虚空を掴んでも、髪の毛を雀つて
も、太衛門どんはなかな／＼退かぬ。

が、疼痛が止むに及んで、忽ち忘れたやうに成つ
て消えた事がある。

―― 其處で今考へた ――

其は敢て、太衛門どんが顯れ出で、己を苦しめ
たわけではない、體に忘れられない疼痛があつた、
めに心を他に轉じ得ないで、水車の廻るが如く同じ
事を繰返したのに相違ない。で、なければ、大きく、
力ある、我に堪へない、重い、静なものゝあつて押
包んだ中に、翻然と不思議な影の顯れるのは、恰も、
深い、可恐しい、もの言はぬ林の下から、名も知ら
ない怪鳥の羽搏いて飛ぶやうなものであらう。或は、
黒雲の封じた空を、一閃して、電光の馳するが如き
ものかも知れぬ。

然矣、大自然に封すれば蓋し其の通りであらうと
思ふ。

が、扨て我ながら孫一どの、病氣なれば太衛門ど
ので、諏訪の旅籠屋に泊つて居れば、諏訪の旅籠屋
三輪の茶屋だ。氣もない事さ、と思ふのであるが、
峻山嶮嶺を枕に控へ、名だゝる湖を袖に抱いた、信
濃一國諏訪の深夜に、旅籠屋、旅籠屋、旅籠屋が、
恚う、とめどもなく、腦中に踊つて、寢床を駈廻る
處を見る、と待てよ、
・
・
・
・

「大地震。」

飛んでもない事を云ふな。深林に不思議な鳥どこ
るか、夜鴉が鳴くでもない。たかが孫一の旅籠屋で
ある。

一寸些細な事であらう・・・とした處で、
恚うまで、怪しい形の旅籠屋が、字に成つて、繪に
成つて、聲に成つて顯れる處では、何か一つ大なる
懸念があつて、それが耳の痛んだ時の如く、こ心に
忘れられないためになければ成らぬ。

あの、二枚の障子なれば、起きて出て、隔の襖を
閉切つても雑と濟む――
あらず。爰に、此の諏訪の旅籠屋に聊か懸念があ
るのである。

一體、松澤は今夜が東京へ歸途なので、往路は三人連で、一晚おなじ此の旅店に宿つた。座敷も二度めの馴染であつた。

で、其の晩の賑かだつたを思ふにつけても、一人旅は三合の酔も早く醒めて夜が寐られなかつたから、十時頃に既に寢床に潜つたのを、十二時を聞いて程經つてから、最う一度起きて温泉に入つた。

其の時の事である。

此家の浴槽は、二階を下りて長廊下傳ひに二三段低く成つて、姿見に衣桁を置いた板敷から、又下へ四五段下りる。．．．大な建もの、乾の底の、恰も穴藏めいた處にある。

唯、ほと／＼と零する、寂然した、誰も居らない硝子戸を、裸體で開けると、おや／＼氣紛れな人間が來たよ、と言はないばかり、温い雪のやうに、内

籠こもつて居ゐた湯ゆ氣げが、羊ひつじに成なり、蝶てふに成なり、鯉こひに成なり、さま／＼の形かたちに成なつて、むら／＼と擦すれ違ちがひに、白身はくしんの女神めがみを包つんで、ふツと出でて行ゆく。

颯さつと、其その湯ゆ煙けむりの薄うすれたのが寂さびしい。客きやくのない湯ゆ殿のは、湯ゆ氣げも淡あはし、春はるもまだ淺あさければ菜なの花はなの油あぶらも流ながれず、青麥あをむぎの香かも通かよはず。・・・艶つやのないのが片隅かたすみへ、だぶりと浸つかる、と餘あまり静しづかなので、獨ひとりぼツち、樹きから落おちた猿さるも同然どうぜん、石いしから生うまれた形かたちに見みえた。

遙はるかに、とぼん、と響ひびくのは池いけの鯉こひの跳とぶのである。

「お邪魔じやまをいたします。」

逃にげた湯ゆの姿すがたのあとを見送みおくつて、彼かれは苦笑にがわらひして、そして、しかしそれでも恍惚うつとりと成なつて浴槽ゆぶねに浸ひたつて居ゐた。

時ときに、板廊下いたらうかを、こツ／＼と石いし路こゝろを辿たどるやうに踏ふんで來くる、乾ひからびた聲あしおと音ね、と云いふと聊いさぐか變へんではあるが、温泉おんせんの廊下らうか、何なんとなく心持こゝろもちが滑なめりかでなけれ

ば成らないのに、其が妙に、かさ／＼として近づく。

ふと其が此の湯殿の入口の板戸の前で留つた、とだけでも、婦らしくはない、他に最う一人宿つたと云ふ、陸軍の検閲官、大佐でもないらしい。

湯《ばかり動いて、風もない、死んだやうな夜更に一人。》

「はて、誰だ。」
と思ふ中に、鯁膠のない音がして、がたり／＼とつばかり鳴ると板戸が半ば開いた。

其の正面へ、唯見ると赤禿の頭が一個、薄暗く底澄んだ隅の灯に、黒味が／＼つて眞向きに顯れたのは皺びた顔で、筋立つた大な手の節々瘦せさらばうたを、兩方ふらりと宙へ下げて、楫を取るらしく、よた／＼、と足を運ぶ、膝の骨がカチ／＼と軋みさう。

先づ可かつたのは、棒縞の寝衣に浴衣を襲ねたのを着て居た。柄が松澤のと同じで、旅店のであるから、人間の黥間に成つた。が、然うでないと骸骨の

群むれであらう。寢衣ねまきを脱ぬいだ咽喉のどくび首あちこが落おちこ込んで、肋骨あばらほねが數かぞへられる、一枚まい、二枚まい、三枚まい、四枚まい。

帯おびのかはりに巻まいて居ゐた手拭てぬぐひを、片手かたてにぐしやり、と握にぎつたのが、濡ぬれて居ゐた。 何時いつ入はいつたか、前さきに使つかつたのが、まだ乾かわかないものらしい。顔かほから、手て、足あし、爪つまさき尖とまで、ものに潤うるほひ見えるのはそればかりで、ぐわさ／＼して、口くちの中なかの唾つばも干ほせたやうな干ひから乾からびた老人らうじん 激はげしい事ことは、其處そこに脱ぬいだ棒ぼう縞しまの寢衣ねまきさへ突つ張つり返かへつて、板いたを倒たふした如ごとくに見みて取とられた。

何なんと、それが衣い桁かに先せん様さまなる松まつ澤さわが脱ぬいで掛かけた貸かし寢衣ねまきを、尖とがつた頤あごで、搜さぐる體ていで、熟じつと視みて、やがて向むき直なほつて、額ひたひで一つ湯ゆの中なかを屹きつと睨にらんだらうではないか。

四

「ふツ、ふツ、ふツ。」

と云ふ……老人は其の海綿の如き心臓に、おまけに風穴が開いたやうな、刻んだ息を吹いて、がくつと膝をよちら／＼、踏段を下りるのが、反つくり返るやうで、手を出して、足を下ろして、あゝ、迂る、と思ふと、腰を折つて浴槽の縁へギクリと踞んだ。

松澤が湯を開いて、ぐい、と背中を向へつけて、逃げるやうにしながら、氣に成つて、近々と其の面を見る、と尖つた鼻が俯向けに覗く、小鼻の皺で釣し掛けたやうな、ばく／＼とある大な口の、唇は反らないのに、前歯の缺けたのが、反歯の如く下唇をぎしりと噛んで、すく／＼數へられるばかり胡麻しほの眉毛が押立つ。割合に頬が膨れて、有るか無いかわからない、霜げた耳を掛けてげつそりと頭の小さい、顔色の青い、色の黄な、骨の黒さうな、年齢は七十に餘ると見えた。

が、斜にも成らず、正面を切つて、ト先づ其の手拭を湯に浸して、びちや／＼と音を立てつゝ胸先を二つ叩く、と、げい、と投げるやうなニをしたは尚しもである。

「ふツ、ふツ。」と噴く。

噴くのが、唇を嚙んだまゝだから、鼻息らしい、が、其の噴く拍子に、骨だらけの兩方の肩を濡手拭でぐしやりと左右へ叩分ける。おなじ事を四五度行ると、踞んだ裸體の膝頭へ、其の鳶鼻を突込んで、頤の尖を附つ着けて、可厭に其の・・・恚う、踵の下の湯を見込む。湯氣が掛るか、どろんとした目が濁つて黄色い。

と思ふと針線を捻る様に、殆ど骨ばかりの兩腕を、ぐいと長く左右へ體操の如く擴げたのが、翼の生える禁厭のやうで、磔柱の怨靈に似て居る。

程もなかつた。

老人は又其の腕を搔込んで、犇と肋骨を引抱いて、ぐわち／＼肩を震はすと見る内、突如、手拭を湯に

突込んで、ばつと勿返す

繁吹は来ないが、此には思はず松澤が手で顔を拭いたのであつた。

ずりりと入つた、老人は腰の邊。べりり、と手拭を持つて開くと、湯の上面をぢよろ／＼と横に掬ひながら、

「叱、叱、ふツ、ふツ、叱、叱、ふツ、ふツ。」
と掛聲をする。

聲を掛けつゝ、ぐる／＼とまはりつゝ、野川で目高を追ふ如く、手拭で掬ひつゝ、掬ひつゝ、掬つた湯を流場の石畳へ匆ね上げる 雫が、ぴしや／＼、びしや／＼、と陰に籠つて、此の老人が湯の底を踏む響にも紛へば、何か、遠くから濡足で、板敷を踏んで、人の歩行き寄る音にも聞える。

「雌を呼ぶがな。」
重々不気味ながら、松澤はまだそんな事を思ふうちには助かつた。

處が、其の間もなかつたのである。

「叱、叱、ふツ、ふツ。」

ぬる／＼と來た、汚れた手拭の、苧殻の指の股に
搦つて伸びたのが、丁ど、首だけ出して浸つて居る
孫一どんの頤の下を、會釋もあらず、ずるりとばか
りに搦つたのである。

搦つて、

「叱。」と言つたのである。

あゝ、逆眉毛だ、眉が動いた。

松澤は首から先へ跳上つた。

老人は、くるりと向をかへて、今まで彼が浴して
居たとは反對の隅を又搦ふ。

「叱、叱、ふツ、ふツ。」

此を見ながら、後じさりに成つて、壇へ退いて、
硝子戸をドン、と出て、何がなしに、がらんと閉め
た。

けれども、手拭てぬぐひのづぶ濡ぬれなのが、だら／＼と足あしに流ながれたので、彼かれは血ちを踏ふんだほど悚そ氣つとして、どた／＼と爪つまだ立たつて身震みふるひして、まさか、衣きもの前まへで絞しぼられはせぬ。

逃にげ構がまへをしなから、一度ど閉しめた硝子戸ガラスどを手ての出でくらのに開あけて、壇だんへ、ざつと絞しぼりだ出す。其その途端とたんであつた。

「うむ、」と呻うめ吟めくやうな聲こゑを立て、老人らうじんが、何なんにも無ないに空くうを掴つかんで、向むかうの羽目板はめいたへ叩たたきつける、とばつと云いふ、湯ゆを握にぎつたらしい、打附ぶつかつた泡あわが蒼あをいやうに茫ぼうと飛とぶ。

も一度ど、戸とをしめて、松澤まつざはは、それから手早てはやく寢ねま衣きを着きた。

其の帯を締めた時である。

ばしやり、と又一度、浴槽で湯の匆ねる音がする
と、磨硝子の戸は最う閉めたのに、あの板壁へ叩附
けるのが歴々と瞳に透る。其は尚しもで、雫が飛ん
で来たやうに、松澤はひやりと感へて、再び足を爪
立てた。

「變だぞ。」

と云ふ其の變にむず／＼する爪尖が、老人の脱放
した件の棒の棒編の布子の襟に引掛つて、其の未だ
生暖いのに悚然とする。

ばしやり！

「あゝ遣つてる。」

「うむ！」

と湯の中で呻吟く聲。

それ、羽目板へ、と思ふ目の前へ、何と、氣の所
爲か、薄ら青い、ばしやりとした一掬の湯が團に成

つて擲附けられた、と見る／＼、栗の左右に脚が生えて、蜘蛛の背中が宙に燃えるやうでもあり、すぐれた紫陽花の花の影にも似て居る。それよりも、ぐしや／＼に藍を塗った眞向の髑髏に肖如だ。

唯見たのが、正に眞正面で、途方もない、松澤が面的に向合つて居たのであるから。

吃驚して、思はず、目も鼻も一所に面中を引摺めると、心得た、と云ふもので、件の影がひく／＼動いて呼吸をつく・・・其が、蜘蛛が脚をニくより、紫陽花に痘痕が殖えるより、又それよりも、髑髏が頤を鳴らして齒を食切るに異なるなし

・・・とした日には、我が顔の、皮を剥いて、血が藍の如く滴つて映るのである。

慌てゝ彼は、引搔くばかり、平掌で顔を擦つて見た。湯上りの手拭同然、濡れては居るが、鼻もある、目を突いても穴ではない。

尤も此なりで自分の頭が髑髏に成るやうでは、湯

を掬しゃくふ老人らうじんは、墓はかの穴掘あなほりの化ばけたのか、魔法まほう使つかでな
ければ成ならぬ。

松澤まつざはは然さままでに巔倒てんたうしたのではない。

今いまは消きえたか、消けしたか知らぬ、が宵よひに來きた時ときに
は衣桁いかうの傍そばにも電燈でんとうが點ついて居ゐたから、丁ちやうど爰こゝに向むき
合あつて彼かれが立たつた場所ばしよに、一面めんの大おほき姿見すがたみの掛かつた
事ことは知しつて居ゐた。

で、何なにか、もの影かげの映さすのに不思議ふしぎはないが、
硝子戸ガラスど越こしに、あの老人らうじんの掴つかんで投なげると思おもふ湯ゆの雫しづ
見くみたいな奴やつが、ををかしく髑髏しやれかうへの形かたちになつて映うつるらし
いのが、少すくなからず、不氣味ぶきみだつた。

「えへん。」

彼かれは落着おちついて一つ咳拂せきほして、

「妖怪えつくわいめ、己おれを威おどさうたつて、然さうは行ゆかない。」

それ、何どんなものだ、と當たうの鼻はなを指ゆびさゝないばかり、
近々ちか／＼と顔かほを差寄さしよせる、と例れいの可厭いやな影かげのほか硝ガラ
子の面めんに何なんにも映うつらぬ。姿見すがたみは其處そこだけを龜裂ひびの入い

つたやうに残して唯一面に湯氣に曇つて居るのである。

「ふツ、ふツ、ふツ。」

噴くのは己ではない。

「ふツ、ふツ、ふツ、ふツ。」

待てよ、自分ではない、が、恰も姿見に突附けた、鼻から呼吸が發奮むやうに、穴藏めいた浴槽で、這奴老人がはじめたのである。

「叱、叱、叱、ふツ、ふツ、ふツ。」

噴散かす。

其の噴く息に従つて、姿見の面が、彼方、此方、むら／＼と斑に晴れる、晴れるのではない、兀る、と其處へ、水溜へ翩翻として鳥影が映す體に、孫一の顔が、澤山な孫の數ほど、ひら／＼と顯れる。

•
•
•
•

「叱、叱、ふツ、ふツ、叱、叱、ふツふ。」

今は早や呪詛と言はう、湯殿の魔法に従つて、怪
み、訝る、松澤の眉が引釣り、眼が欬ち、鼻を怒ら
したり、脣がゆがんだりの、苦い面が、種々に成つ
て、幾つもの、あの蒼しよびれた髑髏を眞中の蕊
にして、奇化な幻影の環をぐる／＼と渦に巻く。

「呀、尋常ごとでないぞ。飯綱使め。」

松澤は抵抗ふ如く拳を揮つて、其の握つたまゝの
手拭で、べたらに敲いて姿見を拭廻す、と湯氣は一
面に颯と消えて、やがて硝子のみ、茫として何にも
ない。

吻と息を吐いた時、それでも餘程あせつた後で、
虚氣と成つて手拭を床に落す。

ニツ三ツほと／＼と、何處やらに、雫の音がして、

浴槽の中も寂然とした。

温泉に一人小夜ふけて、故郷遠き思ひあり。湖水は近き穴のやう、山又山は雲にして、黒く屋の棟に蔽はれ累る。

「あの、手拭を扱ふ處は、小手さきの働きらしいが、其の實、光線應用の硝子仕掛の西洋手品だ。」

何か、變化の正體を見顯した勢、勝に乗つて、確に姿見、と最一ツ念入りに、縁を壓へながら裏搔くまでに仕留める氣構で、衣桁の端から顔を入れて、道具立の其の奥を覗く、と蜘蛛の巣には引掛らなかつたが、咽せるほどな煤が芬と來る、其處が壁で

――

如何様にも何時が世に拂を入れた事ぢやゝら、埃だらけの眞黒三昧、と煤の色まで見て取られたのは、一つ、蛞蝓が這つた跡らしい、壁の落ちた穴があつて、其處から、幽に灯影が映して居るのであつた。

赤い、どんよりとした陰気な色。

「・・・座敷がある・・・」

こんな時に透見をするのは、陣屋へ忍んで、諏訪法相と、云ふのに手を掛けると齊しい、彼は胸が轟いた。

また意地悪く見たいもの。

密覗く、と灯は行燈、今時此は、と思ふのに、火屋口も開けず、掻立てゝもない。薄暗いのが、又妙に、貼立ての紙が新しい、そればかり、漫に閨の春めくさへ、身に染みるやうで尚ほ寂しい。

唯、見ると、其の行燈の下へ、はら／＼と流れた、緋の媚かしいものがある・・・恚る折から夢の裡に緋鯉の泳ぐ姿である。が、怪むべし、婦人の膚に附いた柔かな裊の溢れたので・・・一結び腰を緊めて、眞白な姿が露に、艶やかな黒髪まで点れた油に濡々と灯に映つて・・・十五六畳、二十畳、じと／＼霞んだ、湿つばい、そしてだゞつ廣い大なるうちの一處に・・・ほんのりと、紅を

塗つて白粉つけて繪のやうに浮出いて、宛然幻に見
えながら、燈心の灯に照らされる、と亦それが、雪
にも紛ふ肉を透して、ちら／＼血が通ふものの如く
である。

向つて一側の障子で、折曲つて、其處が廻縁であ
るらしい。同じく障子。一方は壁らしい。

誰だい、も一ヶ所の、其壁の穴から覗いて居るの
は？

拙者でござる

松澤孫一、と名のるも障れ！ 婦人が悄乎として
膝を支いた處に、枕を並べて、一組、格子縞茶と黄
の四幅蒲團を掛けた、廣い寢床が敷いてある。

壁を壓へて見直した。

七

婦人は撓かな兩手を――片足投げたらしく襖
 が流れる――其の紅の膝に置いた、白い指も、
 すらすら数へられるほどだから、一先づ安心、後手
 に縛られて居るのでない。

雖然、山賊の話で聞いた、雪の肌には、緋縮緬、と
 云ふ姿、人身御供の美女を狒々が圍つて、一鹽加て
 た餌食に似て居る。

とは言へ、灯は暗し、間はあり、覗く透間も微な
 り、扨てそれも朧氣で。立女形の品容を損ずるけれ
 ども、見た處は、燈心の血の通ふ白張の行燈が、緋
 縮緬でべたりと坐つて、髪はその暗い影を、ざつと
 捌く、と今にも、もゝんぐわ、と一上くRTあが《
 り目をして、御見物をして反返らしめようとするが
 如き風情であつた。

松澤の目は、しかも、膠のやうに、壁に附着いて
 離れぬ。

何となく、其の、人の氣に引かれたらしく、行燈の胸に乳房は無いが、あの、影のやうな黒髪の縋れから、微に額が見えたと思ふと、振仰いだ面影らしい、ちらりと蝶のやうに瞳が動いて、蒼白い鼻筋が、行燈の灯に、すつと通る。

「あツ。」

と思ふ、咄嗟なりけり。

「うゝむ。」

と、もの苦しい呻吟聲を立てると齊く、ぱツ、と雫を掴んで投げた音。

「何奴ぢやい。」

と湯の裡で、老人の皺嗶聲。

ぎよツとして、壁を離れて、天窓から窺んで、然も屹と成つて見構へた、松澤が、怖氣にも勇氣にも、其の張合の抜けた事の夥多しさは。

「げえ、げえ。」
と言ふ、湯を抜くやうな

大きな欠。

―― それ、即ち此處へ、幽靈の如く、ふらりと出て来た。――

「待て、待て、え、おのれ。」
で、其の、頭から、足へ飛んで、袖を潜つて、ひよいと胸へ乗つた處を、（旅籠屋）を引摺んで、其のまゝ、熟と手を置いて考へると、氣に成つて、氣に成つて、希有で、不思議で成らないのは湯殿で視た事の夫なのである。

恰も、耳のうづくが如く、身から、心から離れないのは、確にそれに相違ない。

一體爺は、あれは何だ。
夢か。

「何が。夢なものか。」

第一婦人は？・・・

「一ちく、たツちく太衛門どんの、乙媛様だ。」
と、偶と思ふと、追續いて、

（一ちく、たツたく、太衛門どん、
一ちく、たツたく、太衛門どん。）

「あれ。」
松澤は、

「わがて
で思はず
耳を壓へる。」

處ところを透すかさず、太衛門たゑもんどんが、むら／＼と繫つながつて、のべつに出でて来る。

「はゝあ、あの爺ぢやういは太衛門たゑもんどんか。」

(一ちく、たツちく太衛門たゑもんどん。)

「ちよツ、止よせ、留やめないか。」

(乙媛様おとひめさまは、

ちんがらぼんに追おはれて、

泣なく聲聞こゑきけば、

痛いたいとも言いはず、痒かゆいとも言いはず、

唯泣たゞくばかり。)

「成程なるほど、口もくちきかないで、唯泣なくばかり。成程なるほど、先刻さつき視みたあの婦をんなは、乙媛様おとひめさまがちんがらぼんに追おはれた處ところだ。」

然さうだ、とむつくり起返おきかへらうとして、ふと小首こくびを傾かたむけ、

「然うすりや、爺は、ちんがらぼんだ。」
と氣を取られる、と隙を狙つて、（旅籠屋）
が又逸疾く狂出す、ひようい、ひよい、ひらり、ひ
らりと躍る。や、匆ねるわ、飛ぶわ。

「これ！ 可加減にして貰はう。」

足をばた／＼と遣つて寝返りをする下から、土籠
が三疋動悸に成つて引掻くのは、忘れられない此の
旅籠屋の異變なので。

ために胸騒ぎがすればするほど、懸念に堪へぬは、
行燈の蔭の婦人で、其の色香で、其の姿で、其の面
影で。と、云つて決して、のつぺらぼう、目一つだ
つたり、口が耳ま で裂けて居たり、鼻が伸びて槍
を引搦む、と云ふのではない。

綺麗な、溫柔した、人がらな、其の眉容が、嘗て
松澤の知つた婦人に其のまゝなのである。

往路の三人づれが、一人は、鹽尻から中央線に乗

換へて、此は名古屋から伊勢路へ掛る
一人は、長野で分れて越路へ行く。ト其處から路を
別にして碓氷を通つて、すぐに東京へ引返す筈だつ
た松澤が、同じ汽車で後戻りをして、再び上諏訪に
宿つたのは、實は今のが其のまゝだと云ふ、其の婦
人に、最一度逢はうばかりであつた。

何を隠さう此の町、城裏の遊廓の某樓に、袖と云
ふ遊女なのである。

はじめ、三人連で、此の温泉に遊んだ事は一度云
つた。

夜の其の十二時を過ぎて、宿が迷惑らしいので、
漸と膳を下げる、と清らかな靈魂は美しく寝ようと
しても、酔つた酒が、なか／＼承知をするのでない。

「何方へお出掛けなさいますんで？」
最上鎖した大戸の鍵を、内から番頭に開けさせた。

「揃つて親の敵討だ。」

と伴侶の一人、等々力、と云ふ、大分の金時計
計を持つた、少々工面の好い男が言つた。此の男の
封手に成つたのが、其の袖であるが――

番頭は澁い顔。

夜半の春の朧月。

「われらの手段は旅行にして、其の目的は美人な
り。」

と、等々力は帽子の上へ貸手拭の頬被。城跡の
公園の石垣を右に、大手あとの小橋を渡つて、道傍
に湧く湯煙の、樹々の枝葉に、ちら／＼と、霞の花
の咲く中を、ばけものが三個通つた。

紅い燈、黒板塀、廓の月は棟にあり。

「如何様で。」

「え、如何様で。」

中に警句を吐いたのがあつた。

「後學のためです――え、お三方。」

一、汝等不埒につき、諏訪湖お構。申しつかつた、水放れの鯰と鮒と云ふ顔色で、翌朝である。恠うした徒に後朝などは決してない。

引つけとか云ふのであらう、二階の取着きの廣間の真中、隠家の穴には四角過ぎた卓子臺の周圍へ、尾鰭をすくめて、ごちゃ／＼と寄つて、泥のやうなる宿酔の息を吐く。

をばさん罷出で、肥つた腹を、どつしりと、手を支く事、蝦蟆の如し。

「誰方もお早う。」
 「お早う。」と、中でも年少な新郷と云ふのが應じた。

「早いものか。」
 等々力が帯の間に手を入れる、と其の見ようとしたり時計が無かつた。

「お時計が――加次郎どん。」と、呼びながら、をばさんは、のそり／＼と廊下を出て行く。

鐵と、ニツケルとの中に、一人、等々力のが黄金にして、心覚えは三階の寢床の枕頭に置いたのである。

やがて、をばさんが若衆を連れて二人で出たが、當然持つて来る筈の時計が無い。

「無い？」

「無い筈はない。」と、松澤も言った。

「お覚え違ひで、お宿の方へ置いて來なさはしませんか。よく有る事でございますがね。」

「え、お三方様とも、大分御酌酩で在らつしやいましたで、へい。」と若衆揉手で口を添へる。

「いや、確かに此の人は持つて居たよ。」と新郷が一寸居直つた。

「念のために、それでは、最う一度、加次郎どん
お捜し申して。」

「就きましては、でございませぬ、旦那、お置き
なさいました場所に、お心覚えがございませうで、
お立會ひを願ひます。」

「さあ、置いた場所と云つて、其奴は俺は確には
覺えて居ない。まあ可いや。」と斷念めたやうな
事を言ふ。

「可くはない。」と云つた松澤は、其の時計が
西班牙の巫女が欲しがりさうな、一種不思議な、色
氣の有るのを知つたゞけに、自分の品を失つた如く、
安からぬほどに思つたのである。

「よくはございませんとも、銀やニツケルと違ひ
まして、此が黄金と成りましたね。」とをばさ
んがニヤリと笑ふ。

「だから構はないよ。」
「否、僕が立會はう、寢しなに三階まで一緒に行
つて、何んだか置いた處を覺えてゐるやうだから。」

「それとも、途中でお落しに相成つたものです
か。」

「誰方も御歩行でございましたからな、へい。
處へ、廊下から、ひとがらな女が静に入つた。」

「何うなさいましたの。」

十

一 小間縁のとれた、木の大きな八角火鉢に、火の
 氣の少いののに、三徳を突込んで、べこん、と掛けた
 眞鍮の古薬罐の尻餅をついた、口から泣出しさうな
 のを、優しい目で、うつむいて、熟と視て、白い手
 の友染で、取つて、眞直に掛け直しながら、

「お時計は私が見ました。はあ、あの、お寐つて
 からは存じませんが、御酒をめしあがつて有ら
 っしゃるうちに、時間が早くば歸らう、とおつしや
 つて。ですが、大變酔つてらしつてお目がちら／＼
 なさいましたんでせう。――此のお座敷です。――
 そして卓子臺の上へお載せなすつて熟と御覽なさ
 いましたわ、三時半、とおつしやいました。はあ、
 確に見ました。」

「確に、とお言ひなすつて、あなた、可いんでげ
 すかい、ものには間違ひと、云ふ。……」

若衆に皆まで言はせず、
 「可ござんすとも、確に私が見ましてすよ。」

をばさん等三人が、険い目で、揃つて、じろりと婦人を視た。

一寸一度俯向いたが、

「屹とお捜しなならないぢや、」と見返した目は清しかつた。

若衆は、黙つて衝いと出る。

「かゝり合が抜けません、う、う。」と大溜息で、をばさんは、大きな膝を敷居の裡へづしり、と入れた。

「はゝあ、便所においでなすつた、旦那、便所かも知れませんか。」

婦人は、其の番當に流眊して、

「私がおつき申しましたから、お落させはいたしません。」

「やあーあつた、ございました、矢張り夜の具の袖だ奴さ、そら。」

と重さうに掌を下げるのを、番頭が横から覗いて、

「失禮ながら、結構な御懷中で、へい、へい、へい。」

をばさんは、乳に響かす抜衣紋。

「三度目が、正直々々。」

其の婦は、眉に些と愁のある、色白ながら艶のよくない、すなほな髪かみの銀杏返いてふがへしに、淺黄絞あさぎしほりの手柄てがらを掛かけて、小袖こそでの縞しまは媚なまめかしいが、帯おびの結目むすびめをふつくりと、胸むねを狭せまく、琉球りゅうきゅう緋ひの袖そでの長いながのを細ほっそり着きて居あた。

「彼樓あすこの、あれは内證ないしよとか云いふ娘むすめだらう。」

空そらが霞かすんで、水みづが澄すんで、城址しろあとの石垣いしがきに薄日うすびの當あたる、小橋こはしを渡返わたりがへす時とき、松澤まつざはは然さう言いつた。

「品ひんが有あつたね、女部屋ぢよろやの娘むすめにしちや。あの徒てあひをきつぱり捌さばくのに位あいくがあつたな。」

唯と、新郷しんこうが唐突だしぬげに、

「はゝ、はゝゝ、位あいくがあつた、高尾たかをぢやないよ。」

「何。」

「袖と云ふんだ。聞馴れないから、我輩は字まで聞いた。座敷で酌もしてくれたし、松澤なんざ、横に成つて膝枕をした癖に、何だ、二人とも酔つてたのかい、死んでたのかい。内證の娘もないもんだ。あれは、等々力の相方ぢやないか。」

「禁酒だ。」

と松澤が呻く途端に、

「南無三寶。」と云ふと齊しく、すらりと横に這ふ朝風に、下ふす路の湯の煙を、吃驚したやうに等々力が三尺飛んだ。

路傍の樹に、チチノと雀の聲。

「まさか、とは思ふがね、昔だあの婦は、無事
 ぢや濟まない。小刀針と云ふので賣場に縛られて殺
 されます。是非、歸路に君が寄つて、深切も謝さう
 し、眞心を稱へようし、第一、他のものとも憚らず、
 膝枕をした過退だ。其のわびもすべし。くれ／＼
 も様子を見て遣つてくれ給へ。俺の旅行は十日ばか
 りかゝるから。」

長野で分れる時、等々力が眞面目に頼んだ。
 で、松澤は諏訪まで歸ると、構ふものか。まだ日
 没前を、停車場から俵を城裏へ横づけにした、が、
 あゝ、世は果敢い、あの、人懐こさうなのが、一層
 もの悲しく、身に染んで思はるゝ、と、裨は最う其
 の樓に居なかつた。

急にひいた、とばかりである。

袖が掛つて、優しい指が乗つた、と思ふと、見覺
 えた、あの、化けさうな眞鍮の藥罐も可懐しく、灰
 の白さも淡雪の春。

―― 太衛門どんの乙媛様が、はて、其の裃に
肖如である。――
「餘り不思議だ。」

松澤は又寢床の上に起直つて、氣を緊めるやうに、
夜具の萌黄の綴絲を、確り指に搦むのが、直ぐに青々
とした草に茂つて、座敷が、渺……と野原
に成るまで變な氣がする。

偶と、又横正面の次の間の、あの、二枚の障子が、
をかしく、朦朧とした霞に見えて、外が穴で、何う
やら、其の穴の底に、行燈が薄り點れて、先刻の婦
が悄乎と、衣も、膚も、影法師の如くに差俯向いて
居さうで成らない。

何故か、自分で前後を見るのが寂しいやうで、お
つかな、びつくりと云ふ……其の癖、沈んだ
陰氣な足取で、密と室の内を歩行き出すのが、希
有にも、何かに引寄せられる。其さへ有るのに、爲
なけりや相濟まない義理らしく、發作的に、殆ど痛
い處を打撲く口惜紛れ、と云つた工合で、一枚其の

障子を開ける、と冷い風が目を刺した。

想像の煙に形が備はり、毛が生えて、果して、狭い、眞暗な階子段。

裏階子に不思議はないが、座敷の電燈の光を、心で手繰り寄せて、斷崖に立つた氣で、體を極め、足の筋を硬ばらして、恐々覗くと、眞下の穴の底と云つた處が、ぴツしやりと板で仕切られて、開くとは見えず、釘で打着けたらしく思はれる。

唯、たゝん、と地の底の岩を打つ如き水の音、温泉か、とも思ふのに、其の響きが、ゾツと氷の如く身に染みる。

「あゝ、（諏訪の旅籠屋）だ。」

身震をして、其のまゝ閉めて、寢床まで後退りをして戻つて來たが、さあ、愈々寢られぬ。

「何とも、氣に成る。」

更に湯殿へ行つて、前の姿見の裏から、最う一度覗いて視よう。で、衣桁の手拭を濡れたまゝぶら下げたが、夜更小更に、此の體は、首をくゝる紐を持つて……と思ふと、それなり、天井がもう見られぬ。

がつくり、と成つて、うつむいて、陰々たる表階子の廣いのに下りかゝる、と下階の襖の裏あたりで、女のキリ／＼と幽な齒ぎしり。

爾時大佐を思出した。尤も飛彈の山へ行つたほど間違いが、それでも虚空に毘沙門天。

「！ー われらの手段は旅行にして、其の目的は美人なりー」

忽ち娑婆に成つて、そして獨りで苦笑した。でない、と、あれ、あの、大きな柱の影に吸込まれて消えたらう。

「先づは……無事か。」

姿見の面に人の顔も映らず、湯殿に骸骨の音もせぬ。其の代り、其處の電燈も最う消えて居たし、來る間の廊下も、離れた處の五燭をたよりに、壁を手探りにせねばならなかつた。

見當を着け、姿見の裏を透かして、殆ど鼠の巢へ首を突込むくらの覺悟——われらの手段は旅行にして、其の目的は——

彼は、視機關を視るのだと思つた。……然う思つて斷念めたいくらみであつた。何故と云ふに、爰に行燈の薄灯りで、暗紅灰粉の彩りして描き出された、古壁、黒襖、破障子の裏の蒼白い婦の姿は、宿命ある約束事の、豫て彼がために設けられた、一幅の、怪しき繪畫の如く感じられる。

其の婦は袖であつた。

いで、其の老人は、此の機關の口上言であらう。

が、口上言が、其繪に抱着いて居るは、そも何事ぞ。

たゞ抱着いて居るとだけでも、あの、裳の紅が、裸身細腰の色であつたなら、こゝに記す事も憚らねば成らぬ。けれども、其は、怪しや緋の袴を穿いたので、美人は、そして白衣を着て、今度は、灯の下に胸を仰反らして倒れて、白い顔がツくりと、黒髪とゝもに此方に向けた、一屈め、褌を折つて、すくめた膝を爪尖に掛けた、投出した裳が、古疊の上で、濁つた水に、亦緋鯉の尾の如く流るゝ風情が、行燈の蓋を上げた燈心に、此時はよく見えた

唯棒縞の布子のくなゝの背を丸めて、袴腰に踞つた、件の老人の形は、蛇がとぐるを捲いたやうで、白衣の綾に貫くばかり、眞俯向けに押着けた鳶鼻は、鎌首に宛然である。骨ばかりの瘦せた兩手で、且つ緊乎と婦人の胸にしがみ着いて居るのである。

婦は言ふまでもなく絶入つたらしい。

老人も、扱は呼吸は絶えたな・・・何うい
たして、あの黄色い目が、其處等に流出しさうにと
ろ／＼と動いて、黼が雛の官女を横銜へにした、と
思へ。

「ふツ、ふツ、ふツ、ふツ。」
呀！ 向うむきの夜具が、枕から持上つて、もそ
／＼と動くと、むくり出たのは、渋紙を揉んで束ね
たやうな、此も、七十には餘んぬべき、よぼけ老媪
が、赤むけの地にべた／＼と黒鬢つけの筋を繫いで、
小さな圓鬘を附着けた、が崩れかゝつて、鴉の死骸
を頂いた古狐の状こそあれ、仇汚れた鬱金木綿の細
帯一つで、のろ／＼と疊を這出す

是非もなや、這つて来る。

「ふツ、ふツ、ふツ。」と噴いてー
噴きながら、這ひながら、恚う片手交りに、頭か
ら、耳から、一寸一寸と拂ふと、守宮の指の二
くが如く、ずる／＼老人の横に這掛つて、喘ぎ／＼
絶ゆげなる聲を出した。

「女郎衆は死んだかや、ふツ。」

「ふツ、息は、ふツ、息は有るたいの。」

「紐を解いて、胸でも擦つて遣あされ。」

「ふツ、ふツ。」

「の。」

「うゝ。」

「なう……」

「うゝ、／＼。」

雙方氣だるさうに頷いて、首を揃へて顔を合はせた。老人のそれよりも、老媪の額の目の白さ。

紅色の紐が生血の如く、老人の手に搦まつて、老媪の爪に、婦の乳の見た時、松澤は我を忘れて板戸を敲いた。

行燈が、ふツと消え、

「見ないの。」

「見たか。」と云つた。

聲が一廻り天井の上から、ぐわんと響いた、凄さ

と云つたら。

「一ちく、たツちく、太衛門どん。．．．」
で、風に木の葉の舞ふ如く、吹飛ばされたやうに
舞戻つて、寢床に潜つて、引被いで、耳を壓へた。
「諏訪の旅籠屋。．．．諏訪の旅籠屋」

諏訪の旅籠屋、
（旅籠屋）
が、今度はまるで
お念佛。

諏訪の宮、諏訪明神の社の大鳥居前に、柵屋勘衛門と云ふ茶屋旅籠がある。其の勘衛門どんは知らないが、三五六の姉御と云つた、小股の緊つた、も言のきつばりしたのが、

「まあ、旦那、お炬燵は如何でござりますえ。」
 諏訪の（何とか、炬燵）と云つて、名物だ、と云ふ、其は忘れたが、店の框の街道寄の軒先に、堅さうな大夜具をかけた炬燵があつた。

松澤は澁茶の茶碗を差置いて、
 「炬燵なんて・・・寝了ふ。」
 柵屋の世馴れたらしい女房にも、此は解らなかつたらう・・・昨夜は諏訪の旅籠屋で、一夜、彼は眠らなかつた、のにも係はらず、我にもあらず、夢で百里もうるつき廻つた心地がして、疲れ且つ惱んで、床を離れたのは九時を過ぎた、日は明るかつた。

が、それでもー

「見るないの、」

「見たか。」

と、うめいた丑の刻さがりの、老人と老媪の聲が、
耳に着いて、怪しい密室の挿繪の繪解は給仕した年
増の女中にも聞かなかつた。聞かなかつたのではな
い、聞かれなかつたのである。――薄氣味悪さに。

却説、諏訪町から、約二里半、彼が明神に詣でた
歸途である。

旅するものは、便宜だにあらば、土地の鎮守、森
の宮居に、心して詣づべきである。神は、社は、草
の芽も、樹の葉も、處々の主人でおはす。

と思ふほど、聳ゆる峰、高き山の如き鬱然翁然と
して森巖なる松杉の大樹の根に、外套を被た蟻の如
く、鳥居から顔を出して朝風に詣でた身は、颯と一
嵐、淨めらるゝ塵も嚴肅。常盤樹の落葉の、鳥影も
なき廣前の石に、サラ／＼と鳴つて、ばら／＼と立
つのも、神樂の音、巫子の舞ふより床しく、奥殿に
晝の月の如く輝く鏡に、彼は、初めて、昨夜からの

目の判然覺めた思ひがあつた。

俾は茶屋に待たして置いた。

「お寢つても可うござんす それだと、手狭ではございますが、奥にもお炬燵がありますよ。」

「旅のものだよ、串戯ではない。車夫、支度は可いかい。」

「へい／＼、御乗車なすつて。」
「待つとくれ、一寸、お上さん、はゞかりを。」
「はい、其の縁側をお出で下さいますと、突當りに。」

南天に日の當る、南向きの縁の鉢前。

唯、柄杓を取つて、縁寄せに、靜に水を汲んだほど、其の手水鉢に、二輪 ー 三輪 ー ー
輪 ー ー 五輪、蒼ながらに花の紅梅、薄紅梅が雲に濃かつた。

「旦那、何時でも、さあ、おめしなすつて。」

車夫しやふに心こゝろを着つけられながら、松澤まつざはは最もつ一度ど、腰こしを掛直かけなほして、早はや、ぬるく成なつた茶ちやを片手かたてに、黙だまつて熟じつと考かんがへた。

「あゝ、遺失おとしものをして來きた。」

「あれ、お大事だいじな品ものを」

「何なに、縁側えんがはだ、大丈夫だいぢやうぶ。」

と言いふも故わざと慌あわたしく、實際じつさいものを落おして來きたやうに、彼かれが縁側えんがはへ引返ひきかへしたのは仔細しさいがある。

其その、紅梅こうばいを視みた目めに、小座敷こざしきの障子しやうじ、別べつに二枚まい、紙かみは眞新まあたしい、が、たてつけ悪わるく、合目あはせめの、引傾ひきかしいで透すいた裡うちに、色いろは、やゝ褪あせたけれども、友染いづせんに萌黄もえぎの裏うらつけた、掛蒲團かけぶとんした炬燵こたつが有あつて、其處そこに、背後うしろむきに、櫛卷くしまきの艶つややかなのを、うつむけに、慥かう凭掛よりかつた衣紋えもんが、這すつて、雪ゆきなす頸うなじにちら／＼と、紅梅こうばい散ちるか、肌着はだぎの襟えり。あの、もの柔やわかな、人ひとがらな、おつとりとした後姿うしろすがた。襟許えりもと、背筋せすぢ、紺かすりの羽織はおりの、堅氣かたぎらしい風俗ふうぞくの、それが却かへつて、城裏しろうちの廓くわわの朝あさの忘わすられぬ、其その婦をんなに、其その袖あそめに、昨夜ゆうへの白びやく衣え、緋ひの袴はかまに、何處どこが違ちがつたとも斷念あきらめられなかつたのであ

る。

「諏訪明神も許させ給へ。」

はた、と留つた障子の外の、松澤の磴音に、ふと
振向いた優しい顔は、

「何うにかしてくれ、三輪の茶屋。」

恚うなぶられては遣瀬がない。

「御免なさいよ、 袖 さ

んぢやないのかい。」

それでも半ばは密と言ふ。

炬燵をはらりと棲も亂れず、其の婦は、言より先
に三指つきの作法よく、しとやかに會釋をした。

十四

「旦那様、私も吃驚しましたー」
貴方がお驚き遊ばした、あの、爺さんと、婆さん
は、あれは二人とも、世間にも不思議なほどな、
病人なのでございます。

病氣も、そして、二人とも、同じ病氣でございま
すつて

でも、煩ひ出しました病みはじめは、もう氣も心
も惱み疲れて、日は忘れたと云つてゝしたが、
・・・・・一昨年あたり、秋の末頃、一朝、婆さ
んが、朝御飯を食べよう、とお箸を、あの、持ちま
すと、生姜の紅漬も、膳には附いては居なかつたさ
うですのに、恚う、あの、目に映つて、小さな紅い
ものが、ちら／＼と見えたんでございますつて。

お宗旨は本願寺の御門徒で、お持佛には未だ御燈
明が點いて居ました。其の影がちらつくのか不知と、
然う思つたさうですけど、それは背中、ちらつ

くのは目の前なんでもございませう。

膳の上へ、水でも流れて居はしないか、其處等を
手で探つて見ましたさうです。――引擦つても、
拭つても、睫毛に火の粉を刻込んだほど、何うして
も消えません。

朝が過ぎて午に成つて、段々、きつぱり見えるや
うに成りますと、點々した、一粒、赤い色だと思つ
たのが、それが裳を、すら／＼と曳いた緋の袴

・
・
・
・
・

「緋の袴、」

松澤は聞いて、目を二つた。

「え、そして、お髪に、びら／＼の簪をさした、
十二重を召した、それは／＼お美しい、氣高いお
姫様の御姿が、それが、三寸、一寸ともありません、
五分ばかりの眞珠で皆刻んだやうに、顔などは透通
つて、綾も晃々、輝いてお見え遊ばす。鮮麗に見え
ます事は、其の唇に紅を含んで在らつしやるのも分

るんです。

婆ばあさんの目めに映うつる 其そのお姫ひめ様が、長ながい袖そでに、檜扇ひあふぎを一折持ひとをりつておいでなすつて、絶たえず、恂かう、其それがひら／＼と、小ちひさな花はな瓣びらのやうに動うごくんですつて。

一日半いちにちはんにち日、些ちつとの間まも留やまないで、然さうやつて檜扇ひあの動ふきまうごかすのが、婆ばあさんの心こころでは、何なにか泡あわのやうな影かげを、右みぎと左ひだりへ、お拂はらひなさいますやうだつたさうですが。

次第しだいに、泡あわの影かげが濃こく成なると、其その形かたちに、目鼻めはなが着ついて、一ツ一ツ。「

「一ツ一ツ?」

「それが、皆みんな、人にんげんの首くびなんです。」

「首くび、首くびと云いふと?」

「え、首くびばかり、生首なまくびでございしますが、幾いくつとも分わかりませんのださうで、五ツや十は數かずへまして、四十だか、六十だか、八十だか、一いっ百そくですか、盡つくされませんツて。」

うよ／＼ぞろ／＼、と渦うづに成なつて、環わになつて、
むら／＼お姫様ひめさまの扇あふぎの周圍まはりを、浮ういて、沈しづんで、舞まひ
廻まはつて居ゐますうちに、幾時いくときたつたか、一つ、ふいと
離はなれて出でて、婆さんばあの耳みみへ留とまつたんです。」

松澤まつざはは片耳かたみみ壓おさへる。

「それが眉毛まゆげの無ない、出額あでこで、口くちの大おほきい男をとこの生首なまくび
だつたと申まをします。．．．．しばらくするとい
又また一つ來きて眉まゆに留とまりました。」

あツ、と云いつて、氣きが遠とほく成なつて居ゐた婆さんばあは、
漸やつと、先さきの耳みみの方ほうのを、手てで拂はらふと、ポイ、と飛上とびあが
つて、天井てんじやうへ附くつ着くいて倒さかさに成なつて赤あかい目めを赫くわつと開あけ
ました。

眉毛まゆげのは、矢張やっぱり、拂はらひますと、此この方ほうは、弗ふつと消き
えて、もとの姫様ひいさまの扇あふぎのまはりへ交まつたんですが、
見覺みおぼえました、其その首くびは、眉まゆの間に筋すぢの入はいつた、細ほそ
長ながい女をんなの生首なまくび。

然さうしますと、あの天井てんじやうのも、いつの間まにか、其そ
處こへ入はいつて廻まはつて居ゐます。

さあ、貴方あなた、それが始はじまりで、目めの釣つつたんだの、

口のゆがんだんだの、鼻のないのだの、齒嚙をした
のだの、幾つとも知れない異類異形の生首が。
炬燵蒲團の綴糸を確乎と握つた、松澤は夜中の姿
見を思出した、が、あたりも野には成らず、絲の色
は紅いのである、否、否、それさへ、生首の血の線
を曳く。

「其の中に、十二一重のお姫様の姿が、緋の袴と、檜扇と一所に、ふつと婆さんの目から消えますと、今度は爺さんの目に宿つたんです。

生首は一度散つて、それから交る／＼、米を出さうとすると米櫃の中に、ぴく／＼、鼠の子のやうに動いて居たり、蓋を取る碗の中の、焼蕪に目鼻がついて、ふはりと出たり、行燈に影が映つたり、思ひも掛けない處から、湧いて出ては、手とも言はず、足とも言はず、腹へも胸へも額へも、取着き、引着き、飛着きます。一番、當人たちも可厭なのは、頭へ乗かります時ださうでござんしてね、自分ながら、上と下に、顔が二つある化もののやうに見えますツてね。

爺さんにも此が見え、婆さんにも此が見えますと、病に成つた二人とも、馴れては居ながら、其時ばかりは、爺さんは、ぎやつ、と云ひますし、婆さんは、うむ、と呻くんですつて。

え、始は、お姫様の姿ばかりが見えて、むら／

泡が湧いて、それから生首が出て、皆目から消えて、待伏せをしたり、狙つて居たり、諸所方々、ありとあらゆる處から、生首が出て附着ます、其の順は、矢張り爺さんも同じだつたんださうですよ。日が経ち、月がかはりますと、次第に、數が殖えて、激しく成つて、寝ると、夜具の襟へ珠數形に集つて、かたまつて胸を壓して、裙から、むく／＼傳つて入ります。」

言ひつゝ、わなゝいて手で拂つた。

「水を汲めば、蜂の子のやうに落ちて居るんださうですし、道を行けば、蝗と同じに飛ぶ、蛙のやうに、ぴち／＼匆ねます。」

湯に入ります時などは、がば／＼一面に浮いて居ますのを、一度手拭で掬ひますさうですよ。」

今は松澤が身悚ひした。

「病み疲れて衰へて、よく／＼でありませんと、手で拂ふのが大儀に成つて、それから、ふツふツふツふツ云つて、噴くことを覺えたさうです。」

噴けば離れます、けれど、離れるあとから附着き

ませう。

長い間、爺さんと婆さんと、息をつなぎ／＼考へましたには、あの、お姫様のお姿は、あれは、可恐い此の魔ものに苦められる二人を救はう、と遊ばして、それで、檜扇で拂つて下すつたものらしい。

でも、悪魔の方の勢が強くて、お姿をお隠し遊ばしたに相違ない。

あの、お姿ををがみたい、あの、お袖に縫りたい。然うすれば吃と助かるだらう、と然う思ひます處から。

ー あの人たちは甲府の町の片端れに、人づき合も餘りしない、樹で圍つた邸に住んで、金を溜めて居るのださうです ー

お宮から、白衣だの、緋の袴だのを算段して来て、と云つて、もう、奉公人は、目に見えません家中の生首を可恐がつて一人も居ませず・・・風説で凌がつて、居周圍の小川から内へは、晝間も人が入らないツてほどですから、看護婦を頼んだんです。

職掌が職掌ですから、高金な禮を取つて、此は來
ました。其の看護婦に頼んで、白衣を着せ、緋の袴
を穿かせて、そして扇で煽がせて、其の前に爺さん
と婆さんが、膝を附合はせて、固つて、そして、を
がんで居たんださうです。

辛抱が爲きれなかつたものですか、一人交代つて、
最うあとが参りません。

些とは氣が紛れようかと、今度、甲府から此の温
泉へ参つて、そして、爺さんが廓へ來ました。

いつか、貴方がたがお居でなさいました、あの、
二三日前から逢ひましてね、あの晩も來て居たんで
す。

果敢ない、賤しい、私たちの中から、看護人を見
付けますつもりでございましたんですわね。

身請の相談をされました。看病と云ふ約束で。で
すけれど、爺さん一人、婆さんまで同じ事とは、秘
されたから存じません。

豫て、それは、死ぬほど辛いつとめですから、私
は連れられて廓を出ました。

直ぐに、因果を含められて、あんな姿に成りました、そして可恐さに氣を失ひますまで、扇で煽いで居ましたんです、私が三人めださうです。」
と、一夜に弱果てた息をつき／＼、悄悄として袖は云つた。

前の看護婦は二人とも、實は、命を失つたのださうである。あとで知れた。

袖が堪兼ねて、其の朝、老人等の手から遁げて、知己の此の茶屋に潜んだ事は言ふまでもなからう。

但し身代金はそれでは済まぬ。

袖は涙を流して居た。

「確りおし、私たちが。」

柵屋の女房に心添をして婦を頼んで、汽車で歸る途中の事。尚ほ話につけたして、嘗て老人が其の魔物に憑かれたまゝ、一度東京へ出た事がある。何かについた、銀座通りの電車の中でも、生首が、ふは／＼飛んで、乗合の膝にも載つたのを、氣の毒らしく手で拂つて怪まれた。窓を覗くと、煉瓦通りの高い屋根を、電車の馳するまゝに、ぶら／＼と、並ん

で、追つて、駈けるやうに見えたる由。袖に聞いたのを思出した時は、乗組の一人々々の膝が視られた。窓なる電線の飛ぶを見よ、得體の知れない人間の生首がふは／＼と横に十五六。

手で拂つて、街と立つて慄としたまで、敢て彼に仔細はない。

等々力が歸ると、身の代は調つた。何をか惜むべき、金時計の價に足らずして然も餘りあるを。

自から甲府に出向いた等々力は、中折の天窓から酔つた頬被りに似ない、臆病もので、法學士と云ふ名刺を出して、内談に及むで、土地の警官の後援を乞うたのである。樹の暗い町外れの彼家へ行くのに。途すがらの談話を聞け。

「……其の看護婦は、ですな、前後二人とも、老人の家で倒れて死んで居たのです。・・・臨検は遣りましたが、死骸に何等の異状が有りませんので、警察でも不問に附して居ります次第で。」

老人は突俯して、眞俯向けに枕しながら、兩臂を

張つてニいて居た。

「ふツ、ふツ、ふツ。」

怪しいのは老嫗である。長持の蓋を剝抜いた穴から、面ばかりを外へ出して、白眼をニりつゝ齒を力チノゝと鳴らして居た。恚うするのが、身體中へ附着く生首を防ぐのに、いくらか凌ぎいゝさうである。

等々力は悚然とした。

「目も當てられません、何とかして遣るわけには行かないものですか。」

「あらゆる、加持祈祷もしたさうです。實際、私

どもゝ心配して居りますが。」

温厚な警官も憚然として然う言つた。

一揖して其處で別れたのである。

【完】